

早稲田大学芸術学校 1年 太田涼介
門田奈優

くぐるで作られる 人が行き交う中に現れる休憩所

計画地：東京都中央区銀座8丁目中央道理
敷地面積：49㎡

「鳥居」や「暖簾」も、線状のものであり、日本の空間構成が線でその線の下を通ることで空間を行き来できるという認識によるものだろうと考えられる。それゆえに「くぐる」は瞬間性を持っているだろう。

鳥居をくぐった先には神聖な神の領域があるわけだが、私達はくぐるまでは気づかない。鳥居をくぐって、ふと自分が元居た場所のほうを見ると、先いた場所が別のもののように感じる。線の下を通るという刹那的な行為であるがゆえに気づかないこともあるが、くぐることで俗世と神聖との境界をはっきりと認識することができる。それは「暖簾」や「躰り口」でも同様のことが言えるだろう。

「くぐる」という瞬間的な行為が空間の切り替わりを認識させている。それは日本的な空間機能であると言うことができ、これこそ私達が「くぐる」に「まだ名もない和」を感じたものである。

今回、この「くぐる」を誘引する線状の要素を我々は「閃鋏」と名付けた。
空間に鋏を打つように、トンと空間を分ける。それは一閃の光のように人の感覚を走り抜けていく。

「閃」という字の成り立ちは「門の中に瞬間的に人が通り過ぎることを見る」ことからきているそうだ。今回だけは主観を逆転したい。「閃」とは門をくぐるまさにその瞬間の人の感覚を表しているのだ。

手法：『閃鋏』

私達は神社を参拝する際、鳥居を「くぐって」境内の中に入る。お店に入るときは暖簾を「くぐって」入る。友人とお別れの時はアーチをつくり、その下を「くぐって」もらい門出を祝う。「くぐる」という行為は日本の日常に転がっており、私達は無意識ながらも「くぐる」ことに特別な目線を向けている。私達はここに「名もない和」を感じ取った。

「くぐる」をその英訳である”go through”と対比することで、「くぐる」が和の要素を持っていることがわかるであろう。即ち、”go through”が「面で出来た空間の中を始めから終わりまで通り抜ける」イメージを持つのにに対し、「くぐる」は線的なもの下を通るイメージを持つという違いであり、それは日本の柱梁の線的空間と諸外国の壁による面的空間の違いと結び付けることができる。

